読書推進運動

No.665

★「上野の森 親子ブックフェスタ」開催へ（2頁）
★「読書週間」ポスターイラスト募集（8頁）

定価60円　会員の購読料は会費の中に含まれる

公益社団法人
読書推進運動協議会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル6階
TEL　03(5244)5270
FAX　03(5244)5271
発行人　佐々木　泰
編集人　片岡　伸子

■「こどもの読書週間」によせて

「つくる」・「読む」・「つなぐ」を一つところにおいて考える
―より豊かな「つなぐ」のために

慶應義塾大学非常勤講師
汐崎順子（しおざきじゅんこ）

「子どもと本を一つところにおいて、そこにおこるじっさいの結果を見てみたい、と思ったのが『かつら文庫』をひらいた理由でした」と、石井桃子さんは『子どもの図書館』に書いている。子どもの本の作り手として石井さんは子どもと本を知る場を求め、自ら本を手渡す場を作った。子どもの本を作ること、子どもに本を手渡すことは三位一体だ。

5月に刊行される『子どもの読書を考える事典』（朝倉書店）の発端は、「子どもの読書」に関する事典についてアイディアを求められた4年前にさかのぼる。そのときは編集に携わることになるとは夢にも思わず、自分がほしい・読みたい事典について好き勝手を語った。「つくる」「読む」「手わたす」を「一つところ」において読書に関する情報を伝えてくれる事典があるといいなと。そのとき私の頭の片隅に石井さんのことばがあった。

多くの人は迷いなく「子どもにとって読書は大切」と言うだろう。でも「読書ってなに？」「なぜ読書が大切？」という問いに明確に答えられる人はどのくらいいるだろう。

編集チームが最初に取り組んだのはこの「読書とはなにか」を考えることだった。当時は電子化による読書の媒体と読書のあり方の変化、多様化が問われ、さらにコロナ禍で生活と考え方が急激に変化した時期でもあった。メンバーの考えは実にさまざまだったが、紙媒体、電子媒体、さらには「本」にさえこだわらない「読書」の根っこを考えたとき、多様な「読書」の姿、新しい「つなぐ」の可能性もみえた。図書館員、司書、研究者、教育者、書店経営者、編集者という異なる立場の者がつながりあったからこその結論だ。

企画段階での「手わたす」が「つなぐ」になったのは、ものとしての「本」を直接子どもに手渡す、というイメージが強く、私たちがたどり着いた「読書」の広さをとらえきれない、と考えたからだ。そしてことばを「つなぐ」にかえたとき、事典の3本柱の「つくる」「読む」「つなぐ」にかかわる人はすべて「つなぎ手」になり得ることにも気づいた。

事典での読書のとらえ方に応じて項目も広がった。「つくる」では、研究者、子どもの本の作り手にそれぞれの専門から豊富な知識を伝えてもらうだけでなく、本づくりの実際についても書いてもらった。

「読む」「つなぐ」では、主として子どもに接している人に原稿を依頼した。特に「つなぐ」では、日々なにを考え、どのようにつないでいるのかを書いてほしいと頼んだ。図書館員、教員、ボランティアなど、現場の人々の尊い実践と経験をそこにいる周りの人に「つなぐ」にとどめず、より広く、次の世代にも「つなぐ」ことが、事典の狙いのひとつだった。

同じテーマを複数の場で「つなぐ」ことも試みた。たとえば「読みきかせ」では、幼保、小学校、図書館を並べた。共通点だけでなく、それぞれに異なる意図と方法もあることがわかる。読書が、子どもの生活がより多様化している今だからこそ、さまざまな「つなぐ」を知り、考えよう。子どもの読書にかかわる人びとがつながり、あらたな「つなぐ」を考えるきっかけになれば本当にうれしい。

●汐崎順子さんたち編集チームによる『子どもの読書を考える事典』（朝倉書店 定価9,900円）は2023年5月10日発売予定です
https://www.asakura.co.jp/detail.php?book_code=68026

シャンシャンは
帰っちゃったけど…

上野の森 親子ブックフェスタ

5月4日・5日 開催決定！

5月4日(木祝)～5日(金祝)、東京都台東区の上野恩賜公園で「上野の森親子ブックフェスタ2023」（主催＝子どもの読書推進会議／日本児童図書出版協会／一般財団法人出版文化産業振興財団）が開催される。従来の5月3日スタートの3日間開催を変更し、2日間のイベントとなった。

新型コロナ流行によるリアルでの開催見送りを経て、3年ぶりの開催となったのが昨年のこと。ゴールデンウィークの上野の森に、約2万6000人の来場者を集めた。今回もじゅうぶんな感染症対策を徹底するのはもちろんだが、今年の3月からはマスクの着用も個人の判断が基本となり、新型コロナの感染症法の位置づけが第5類に変更予定であるなど、社会がいよいよ「ポストコロナ」の新しいフェーズに移行していくなかでの開催となる。

謝恩価格で児童書を販売する「子どもブックフェスティバル」には、今回も60社を超える出展が予定されており、各ブースではそれぞれの版元が精力的に児童書を展示・販売する。開催期間中、本を選ぶ多くの家族連れや保育・教育関係者などが訪れ、ブースを回って熱心に本を選ぶ姿が見られるだろう。

子どもから大人までが各ブースで本を手に取る「子どもブックフェスティバル」

今回は混雑緩和の観点から各ブースのテントごとにレジを配置。会計はクレジットカード、図書カード、QRコードによるキャッシュレス決済のみとし（入場時には図書カードを現金で購入できる）、感染症の防止に努める。さらにレジのスペースには日よけテントを設置し、暑さ対策など来場者へのさらなるホスピタリティ向上を目指す。

昨年に引き続き講談社の「全国訪問 おはなし隊in上野公園」や、隣接する国立国会図書館 国際子ども図書館を会場に、出版関連団体と連携した講演会なども予定されており、上野恩賜公園噴水広場を中心に、子どもたちの笑顔あふれる、もりだくさんの2日間になる。

■「第34回 読書感想画中央コンクール 表彰式」

本を読む楽しさ、味わった感動を伝える感想画が受賞

2月24日(金)、東京都千代田区の如水会館で「第34回 読書感想画中央コンクール表彰式（主催＝公益社団法人 全国学校図書館協議会／毎日新聞社ほか）」が開催された。感染症に配慮し、会場の参加者数を制限。表彰式のオンライン配信も実施された。

本年は小学校・中学校・高等学校あわせて6138校より67万2567点の応募があった。文部科学大臣賞4点、優秀賞8点など入賞者に、賞状が贈られた。

受賞者代表のことばは『ナイチンゲールのうた』（BL出版）の感想画で小学校低学年の部で文部科学大臣賞を受賞した、佐藤紬さん（兵庫県朝来市立大蔵小学校2年）。ふだんからオリジナルキャラクターを考えて物語を書いているという佐藤さんは、「（受賞を）みんなが喜んでくれた。絵を描くことで人を喜ばせることができて、うれしい」と受賞の喜びを述べた。

自分の受賞をみんなが喜んでくれたと話す佐藤紬さん（写真提供：毎日新聞社）

作画感想の朗読は、中学生の部文部科学大臣賞受賞の小笠原和輝さん（北海道札幌市立新川西中学校1年）。『さばの缶づめ、宇宙へいく』（イースト・プレス）を読み、さまざまな壁にぶつかりながら高校生たちがなし遂げた「宇宙食さば缶」プロジェクトに思いをよせ、「壁をテーマにとにかくさばをたくさん描いた。描きすぎて、色塗りがたいへんだった」と作画の苦労を紹介した。

同書の著者、小坂康之さんは、「小笠原くんの絵のさばたちはみんな口を開けていて、楽しいと言っているように思った。だから、壁も小さく感じた」と受賞作の魅力を語った。

■別冊「2022年 第76回『読書週間』行事報告」一覧

割愛した一部行事の内容説明を紹介します

本紙別冊「2022年 第76回『読書週間』行事報告で、一部、説明を割愛した取り組みがありますので、ここに説明を補足します。

●「一日司書」

カウンター業務、資料の配架などの図書館業務を体験する。子どもが対象の場合は、図書館利用法の説明をすることもある。

●「ぬいぐるみのお泊まり会」

子どもたちがぬいぐるみと一緒におはなし会に参加。その後、ぬいぐるみを図書館が一晩預かり、翌日返却。その際、夜の図書館を探険したり、おはなしを楽しむぬいぐるみの様子の写真や「ぬいぐるみが選んだ本」を子どもに渡す。

●「本の福袋」「ラッキーバッグ・ブック」など

タイトルがわからないよう、図書を袋やバッグに詰めて貸し出す。年齢や学年別に袋を用意。各袋ごとにテーマが設定されており、3冊程度が入っている。袋詰めせず、包装紙で図書をくるみ、1冊ずつ貸し出すこともある。袋には、テーマと内容のヒント（内容紹介や職員の推薦文、冒頭の一文など）が明示されており、利用者はそれを参考に希望の袋を借りる。

■「えほん50」最新版 発表

昨年刊行された絵本からよりすぐりの50冊を紹介

公益社団法人 全国学校図書館協議会（全国SLA）は、推薦絵本リスト「2023 えほん50 ―全国SLA絵本委員会選定（協力＝子どもの読書推進会議）」を発表した。

このリストは、2019年から毎年選定、発表されている。今回は2022年の1月から12月までに刊行された絵本より、全国SLA絵本委員会が「ぜひ子どもたちに読んでほしい」と、テーマ、ジャンル、程度さまざまな観点から推薦する50冊が厳選されている。

リストはPDFとエクセル形式のファイルが用意されており、全国SLAのホームページからダウンロードが可能。絵本ごとに目安となる対象学年も記載されている。また、推薦絵本の書影と内容紹介が入ったリーフレットのPDFもダウンロードできる。

「えほん50」リーフレット

全国SLAでは、保育所、幼稚園、学校、家庭、地域などで活用してほしいとしている。

●全国SLAホームページ内「えほん50」紹介ページ

https://www.j-sla.or.jp/recommend/ehon50.html

■NPOブックスタート 写真コンテスト

大賞はイラストに！絵本と家族のひとときを募集

NPOブックスタートは、「第2回 いっしょにえほん 写真コンテスト2023」を開催する。

このコンテストは、NPOブックスタートが提唱する、赤ちゃんと読み手が、一緒に絵本を開くことで楽しさや安らぎを共有する「シェアブックス」の普及を目的としている。絵本を開く親子や家族などの姿をInstagramに掲載し、絵本という媒体が備えている豊かさを伝えたいと企画。昨年の第1回では、全国より356名の応募があった。

募集するのは、赤ちゃんや子どもとの絵本のひとときや、その思い出の写真。投稿写真についての100字程度のひとことエピソードをそえることが必要。

賞は、大賞1名、選者賞5名、入選20名。大賞作は、イラストレーターの山口みれいさんがイラストにし、受賞写真のオリジナル図書カードも作られる。

昨年の大賞受賞作

募集期間は4月20日㈭～5月31日㈬まで。結果発表は6月末を予定している。各種SNSにコンテストハッシュタグ「#いっしょにえほん写真コンテスト2023」と、NPOブックスタートアカウント名をそえて投稿する。

応募方法など詳細は、4月20日にNPOブックスタートウェブサイトで発表される。

●NPOブックスタートサイト

https://www.bookstart.or.jp

各SNS QRコード

左上より時計回りに

Instagram、

Twitter、

Facebook

■伊藤忠記念財団「子ども文庫助成事業」贈呈式 開催

3年ぶりに全国から受領者が集合！ 子どもと本を楽しむ喜びを共有

公益財団法人 伊藤忠記念財団は、3月6日(月)、東京都港区の伊藤忠ビルにて、「2022年度 子ども文庫助成事業 贈呈式」を3年ぶりに対面形式で開催した。

同財団の鈴木善久理事長は、コロナは落ち着いてきたが、世界情勢・国内の子どもをめぐる環境は依然厳しいとし、「子どもたちと向きあい、本を手渡してきたみなさんの活動は、ますます重要になっています」と挨拶を述べた。

選考委員長の石井光恵さんは、今年は同財団担当者による応募者現地訪問ができたことを高く評価。今年の特徴として、子ども食堂や放課後の居場所づくり団体からの応募が目立ったこと、密を避けるおはなし会のためか大型絵本の購入を希望する団体が増えたことなどをあげた。

受領者挨拶を述べるともだち文庫
藤本さん（埼玉県）

受領者挨拶は、ともだち文庫（埼玉県北本市）の藤本富美子さん。40年の文庫活動を振りかえり、「子どもの本をもっと知らねばと学習会を開き、市に文庫が10できた。文庫に本を手渡す人がいれば、来た子どもたちは本に親しみ、広い世界を知ることができる」と語った。また、長崎県立大村特別支援学校（長崎県大村市）の小川由香さんは、今年卒業する生徒が描いた絵「思い出の図書室」を披露し、「病弱・虚弱の子、精神面で不安をかかえる子どもたちにとって、図書室は安らぎの場となっている」と述べた。

功労賞受賞の認定NPO法人高知こどもの図書館（高知県高知市）の大原寿美さんは、同館を運営するうえでの財政基盤確保の苦労を紹介しつつ、「別役実さんや長田弘さんなど多くの人から学び、支えられた。来年開館25周年、元気な図書館を運営していきたい」と述べた。もうひとりの功労賞受賞者 ガーデン文庫（千葉県千葉市）の春林公子さんは、体調不良のため残念ながら欠席したが、「子どもたちの喜びを見てきた感動があったから、50年近く文庫をやってこれた。高齢化、子どもが減っているが、こんなときだからこそ子ども文庫を大切にしたい」とメッセージをよせた。

来賓の野口武悟さん（専修大学教授）は、公務のためビデオメッセージで登場。2000年に制定された「子どもの読書活動推進法」が子どもの読書活動を後押ししたと指摘しながら、「みなさんは法律ができる前からのパイオニア。これまで以上に子どもの読書の多様性を支えてほしい」と受領者・受賞者への期待を語った。

同じく来賓の代田知子さん（日本子どもの本研究会会長）は、コロナ禍であらためて、子どもに本を手渡す大切さ、子どもが本を手に取ることの重要性を指摘し、「子ども時代の読書は心を育む。読書を通じて自分の命も他人の命も大切であると知ってほしい」と述べた。

■「JBBY子どもの本の日フェスティバル」開催

対面とオンラインのプログラムで 本にまつわる「お仕事」を体験！

一般社団法人 日本国際児童図書評議会（JBBY）は、3月17日(金)～27日(月)に、「2023国際子どもの本の日『JBBY子どもの本の日フェスティバル』」を対面とオンライン形式で開催した。

対面プログラムは、17日・18日＝童心社（東京都文京区）、21日・25日＝ブックハウスカフェ（東京都千代田区）、27日＝ポプラ社（東京都千代田区）が会場となった。

童心社会場では、世界60か国の子どもの本500冊を自由に手に取れる「本の世界をたんけんしよう！」、翻訳家の木村有子さんと野坂悦子さんが講師の「ほんやく家体験」、おすすめ絵本のポップ作りワークショップを開催。ブックハウスカフェ会場では、ポップ作りと、子どもによる書店店頭での読み聞かせ体験を実施。ポプラ社会場では、オリジナル帯を作る「編集者体験」、エレキテルの仕組みを利用した「科学あそび」を行った。

「もぐらくん」シリーズをテキストに
翻訳作業を紹介する木村有子さん

「ほんやく家体験」講師の木村有子さんは、自身が訳した絵本をテキストに、子どもたちに質問を投げかけながら、絵と文をあわせて訳す過程を紹介。質問をするたび、会場の子どもたちの元気な手が上がった。

オンラインプログラムは、児童文学作家・絵本作家を講師に、物語の書き方ワークショップ、紙コップ人形の工作と遊び歌、絵本作家と一緒に絵を描いてつながる「ちきゅうパスポート」。対面、オンラインともに、作家、翻訳家、書店員、編集者それぞれの仕事を通して、子どもたちが本の世界を楽しんだ。

■東京子ども図書館「松岡享子さんに感謝する会」

おはなし会のようなひとときで深い感謝と思いを松岡さんへ

公益財団法人 東京子ども図書館は3月12日(日)～18日(土)、東京都中野区の東京子ども図書館で「松岡享子さんに感謝する会」を開催した。

同財団名誉理事長の松岡さんは2022年1月に逝去。財団は、松岡さんが米寿を迎えるはずだった今年3月12日を目標に、「図書館でのお別れの会」を準備。感染症の状況を考慮しつつ、7日間計27回にわけての開催となった。

会のプログラムは、財団理事長の張替惠子さんの挨拶、松岡さんの歩みを紹介する映像「子どもと本の世界を豊かに～松岡享子さんの86年」の上映、松岡さんのエッセイの朗読、参加者からの感謝のことば、献花。ピアノの演奏とともに進行した。

笑顔の松岡さんの写真と花々が飾られた祭壇

張替さんは、図書館でのお別れの会は、松岡さんの希望であること、その会には近しい関係者だけではなく、自分の著書や講演を通じて近しくなった人たちも集まれるようにしたいと願っていたことを紹介。「多彩な才能と際立った行動力をお持ちだった松岡さんが、この国に生を受け、戦後、児童出版が花開く時代に、子どもの本や図書館の仕事を天職とするようになっためぐりあわせは、まさに天恵と言えます」と述べた。

続いて上映された映像では、幼少期を経て、子どもの本と図書館の結びつきを実感した神戸女学院での体験、社会教育や公共図書館の意義にふれて児童図書館員を志した慶應義塾での学び、アメリカ・ボルティモアの児童図書館での日々、日本での文庫活動と東京子ども図書館の設立が紹介された。また、おはなし会の様子や「お話の講習会」、東日本大震災後に陸前高田市に設置された「うれしの野こども図書室 ちいさいおうち」への支援活動など、多岐にわたる実践も紹介された。

エッセイの朗読は、同館の機関誌や新聞に掲載したもの、『子どもと本』(岩波新書)の一節が取りあげられた。

感謝のことばは、各回ごとに1、2名が担当。16日には、松岡さんと交流のあった作家の小川洋子さんが、「松岡さんにおはなしを語ってもらった子どもたちは幸せ。誰かの声に導かれた方が、ずっと遠くまで旅ができる。小説も同じ。心から聞こえる声で書かないといけないと思った」と、述べた。

松岡さんの写真が飾られた祭壇に献花をして、会は終了した。

23日(木)～31日(金)の期間限定で、張替さんの挨拶、「子どもと本の世界を豊かに」、感謝する会会場の様子などで構成した、オンラインプログラムも配信された。会場、オンラインあわせて1450人が参加した。

松岡さんエッセイ集『ランプシェード』

冒頭の挨拶で「感謝する会」を開くにいたった経緯を紹介する張替さん

東京子ども図書館では、この会にあわせて、松岡享子さんのエッセイ集『ランプシェード』を刊行した。これは、財団機関誌『こどもとしょかん』(季刊)の1号(1979年・春)から170号(2021年・夏)に連載したエッセイ全162編を収録したもの。松岡さんはもともと、読んだ本の感想を紹介する予定だったが、おはなしのこと、人々や本との出会い、旅の思い出、社会情勢から感じたことなど、テーマが広がっていったという。松岡さんの足跡、人柄にあらためて親しめる一冊となっている。定価は3300円。同館、書店で購入できる。

また、同館が全面協力した「大特集 松岡享子さんがのこしたもの」を掲載した、季刊誌『この本読んで！ 2023年春号』(JPIC)も発行された。こちらは、松岡さんの翻訳・創作作品、再話、評論などを、著作リストとともに紹介。一緒に仕事をした人たち、松岡さんに教えを受けた人たちがそれぞれ、図書館員、作家、翻訳者、実践者としての松岡さんの思い出とその魅力を語っている。定価は1320円。JPIC直販、または書店で購入できる。

●公益財団法人 東京子ども図書館
東京都中野区江原町1－19－10
電話03－3565－7711
ホームページ
https://www.tcl.or.jp/
こちらで図書館への地図、開館日時、今後のイベント情報が確認できる。

**子どもの本の仕事は、
将来の希望といっしょに
仕事をすること。
自分も元気が出るし、
意義もある。
第一たのしい。
幸せだと思って
続けてくださるよう
お願いします。
2021年秋　松岡享子**

優良読書グループの歩み (4)

2022年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。（順不同）

親子読書会「わっこの会」

代表者　木村　明美
青森県十和田市

〈推薦〉
青森県読書推進運動協議会

親子読書会「わっこの会」は、2011年度にふたつの小学校の図書館司書教諭たちで、学校図書館を利用した「親子読書会」を始めたのが設立のもとになっている。

たがいの小学校の図書館で第3土曜日におはなし会をおこなっていたが、十和田市民図書館が改築されたのを機会に、活動場所を市民図書館に移した。2022年度現在で11年、活動を継続している。

会のねらいは、設立当時から「親子に読書の楽しさを伝える」とし、その役割を無償で行うことに賛同した会員たちで運営されている。

会員は30代から70代までとはば広く、子育て真っ最中の人から現役の教員や発達支援員、学童支援員、退職教員など、さまざまな立場の17名で構成されている。

活動は、公共図書館や書店での読み聞かせ会をはじめ、読書感想文講座や百人一首講座なども行い、小学生が興味をもち、参加できるような企画も行っている。

また、図書館が主催する「子ども司書講座」では、「おはなし会の進め方と実際」を、会員が講師となり進めている。受講した子どもたち（小学校4～6年生）は、おはなし会での体験を楽しみにしていて、企画している会員たちも新鮮な刺激をもらっている。これからも、小学生の子ども司書と一緒に、多くの親子たちに絵本の楽しさを伝えていきたいと思っている。

会を運営するにあたって心がけているのは、会員同士の学びあいである。おはなし会で提供する絵本の情報共有はもちろん、読書関係の研修会に積極的に参加し、新しい知識を学ぶようにしている。

会員のなかには絵本専門士や読書アドバイザーがいるので、講師を依頼され、会として読書講座のお手伝いをすることもある。この講座で得る参加者との交流が、次のステップへとつながっているので、これからも続けていきたい。

また、継続するうえで気をつけていることは、会員の健康である。多忙ななかでボランティア活動をしているので、忘れがちになる健康管理を、会員同士の何気ない会話をとおして行ったり、年間活動予定表や当番表を見直したりして、活動によどみが出ないように進めている。

今後も、未来を担う子どもたちが心豊かな生活を送れるように、読書をとおして地域に貢献していきたいと思う。

クリスマスなど季節のおはなし会も開いています

おはなしの森

代表者　安本　栄子
京都府相楽郡精華町

〈推薦〉
京都府読書推進運動協議会

2001年から2002年にかけて、子どもに本を手渡すためにという趣旨の「けいはんな児童文学の講座」がありました。幼い子どもの物語や絵本、わらべ歌や昔話について学べる講座で、絵本作家さんの講演もありました。

この講座に参加した保護者たちが子どもに本を届けたいと、毎月1回、地域の集会所に絵本を持ちよって、読み聞かせにはどんな本を選んだらよいのか、勉強会を始めました。この勉強会が「おはなしの森」の始まりです。

保護者の読み聞かせには小学校の理解や町立図書館の協力もいただけて、まず年2回の校内読書週間おはなし会に参加して、それから昼休み時間や、朝学習時間へと活動が広がりました。担当者は記録をつけて次の会合で報告し、共有してきました。

小学校の保護者で始めましたが、子どもが卒業しても読み聞かせを続ける人が増えました。私の校区ではボランティア「のいちご」の一員として活動しています。昼休みのおはなし会のうち年2回、巻き絵やペープサートを作り上演しました。準備に3か月ほどかかりますが、得意を活かして協力しあい、結束が強まります。登場人物が多いので、台詞を教員の先生や、ふだん読み聞かせはしてない図書ボランティアさんにもお願いして手伝ってもらいます。私たちの活動を理解してもらえる絶好の機会です。子どもたちはおはなし会をとても楽しみにしています。

小学校以外にも活動を広げてきました。夏休みの学童保育、幼稚園や町立図書館のおはなし会で

朝の時間、昼休みの小学校でおはなし会を続けている

は、子どもたちの素直な反応に、やりがいも増しました。

大人を対象にしたストーリーテリングの会も催しています。短い話でも覚えるまではたいへんですが、聞くのは楽しく、絵本とは違う魅力があります。

あるときは隣の県まで図書館の見学に行きました。有名な建築家が手がけた新しい図書館は、木の香りが心地よく、おはなしのコーナーもすてきでした。

ようやく対面でのおはなし会が再開されつつあります。これからも、子どもに本を届けるために、活動を続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、私たちの勉強会のきっかけとなった講座を企画し、結成当初からあたたかく指導してくださっている太田三紀子先生にお礼を申しあげます。

東広島ストーリーテリングの会「むかしこっぷり」

代表者　檜垣　直子

広島県東広島市

〈推薦〉
広島県読書推進運動協議会

「むかしこっぷり」は、耳で聞くおはなしの世界を一緒に楽しみたいと、2001年に発足しました。現在は東広島市内の図書館で「ストーリーテリング」のおはなし会をしています。

東広島市立中央図書館では、春・夏・秋・冬の年4回、おはなしを語っています。東広島市立河内こども図書館では、毎月第4土曜日に、ストーリーテリングと手遊び（ときには絵本）のおはなし会をしています。

月に一度、会員が東広島市立中央図書館に集まる例会では、おはなしをたがいに語りあい、〝語るおはなし〟の魅力や疑問を話しています。個々のメンバーが小学校や放課後教室でおはなし会を持っているので、その様子も話に出ます。

例会もおはなし会も、都合のつく者が集まります。みんな、できない時期はあるけれど、好きならやめずにいてほしいと思っているからです。細々とでも無理せずやろうねと、21年間続いてきました。この土地から長く離れていた人とまた一緒にできるのも、グループが続いていたからこそだと、うれしく思います。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、図書館や学校での活動は、中止の時期もありました。けれども、感染防止に配慮しながらおはなし会をやっていこうという図書館の方針もあり、再開は早かったです。そんな折、制限のかかっている地域の方に来てもらい、一緒におはなし会をするという、思いがけないつながりもできました。

2021年、コロナ禍の東広島市に新しいストーリーテリングのグループが産声をあげました。同年開催のストーリーテリング講座の受講生が設立した会で、「むかしこっぷり」のメンバーも数名参加しています。この新しいグループによるおはなし会も始まっています。

おはなしを聞くのはもちろん、語ることは「手間がかかるけれど魅力的」と感じている人たちが、枠を作らず、いろんな場所で、いろんな形でつながっていければいいと思っています。おはなしを語りあい、迷ったときに話のできる場があれば心強い。これからも、気負わず自分のペースでおはなしを届けていきたいです。

糸満市図書館友の会

代表者　大城ひかる

沖縄県糸満市

〈推薦〉
沖縄県読書推進運動協議会

2017年4月、糸満市立中央図書館が設立20年の節目を迎えたのを機に、図書館を支援し、協力して活動することを目的に「糸満市図書館友の会」を結成。公共図書館だけでなく、学校図書館、読書ボランティアなどと連携を図り、活動の場を広げています。

現在会員12名。会則により事務局、会長、副会長をおき、毎月第4土曜日に糸満市立中央図書館で定例会を開催。会員より会費2000円を徴収しています。

設立年より、子どもの工作教室、大人のためのおはなし会を開催しています。現在では市の女性会を活用し、講演会や科学あそび、ブラックパネルシアターの上演会などを行っています。市の助成金を活用し、ブラックパネルシアターの機材や材料費が工面できたので、さらに演目を増やしていきたいと考えています。

また、LINEも活用。身近な情報の交換や、研修会での工作や読み聞かせで使う小物づくりが楽しくて、仲間作りの場にもなっています。

子どもたちが図書館に親しむきっかけ作りを提供

少しずつ増えてはいますが、新会員の加入、育成がむずかしいことが課題です。定例会を利用して、絵本の研究、ブックトーク、ビブリオバトルの講習を行い、研修をしています。イベント参加者からの声に、励まされています。

現在、5年の活動を終え、読み聞かせの技術だけでなく、図書館と読書、本についての知識が必要だと感じています。定例会を学びの場にして、会員以外の参加を広く呼びかけていくつもりです。

2023・第77回 読書週間

ポスターイラスト募集

標語は「私のペースで しおりは進む」

秋の「読書週間」のシンボル、ポスターのイラストを募集します。

○賞

・大賞（1名）……賞状と賞金10万円

・優秀賞（3名）……賞状と賞金1万円

・入選（10名前後）……記念品（図書カード）

○応募要項

①標語「私のペースで しおりは進む」をイメージした未発表の創作原画　＊「読書週間」などの文字情報は作品に入れないこと

②サイズ＝B4判、タテ

③用紙・画材＝自由

④CG作品はプリントアウトしたもの

⑤カラー、モノクロとも可

⑥立体、半立体、写真、コピーは不可

⑦応募資格＝高校生以上。合作は可だが、応募はひとり1点

⑧ハガキ大の用紙に以下を明記し、作品の裏面に添付のこと
氏名、郵便番号、住所、電話番号、年齢、職業、メールアドレス（任意）

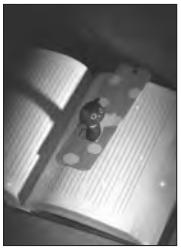
⑨応募締切＝6月23日㈮必着

⑩送り先・問いあわせ先
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1－32　出版クラブビル6階
公益社団法人 読書推進運動協議会
「読書週間ポスターイラスト」係
TEL＝03－5244－5270

⑪発表＝8月上旬、入賞者に通知

⑫入賞作の二次使用権は公益社団法人 読書推進運動協議会に帰属

⑬作品は返却しません。ただし、返却希望の方はその旨を明記し、着払い伝票（必要事項記入、ゆうパックに限る）を同封のこと



2019年
富山涼太さん

2020年
なかいかおりさん

2021年
しらいたまもさん

2022年
たしまさとみさん

事務局報告（3月）

☆2日＝岡部公認会計士・税理士・行政書士事務所と2022年度 決算報告書作成打ちあわせ

・3日＝「上野の森 親子ブックフェスタ2023」出展者説明会に出席（Zoom）

・6日＝伊藤忠記念財団「子ども文庫助成事業 贈呈式」に出席

・6日＝「絵本ワールドin京葉2023」開催打ちあわせ

☆7日＝「こどもの読書週間」趣旨書出来

☆7日＝機関紙「読書推進運動」664号入稿

☆8日＝機関紙「読書推進運動」664号責了

☆13日＝内閣府に2023年度 事業計画書・収支予算書を提出

・14日＝一般社団法人 日本児童出版美術家連盟 懇親パーティーに出席

・14日＝2023年度 伊藤忠記念財団「子ども文庫助成事業」募集要項を各道府県読進協などへ順次送付

☆15日＝機関紙「読書推進運動」664号出来

☆15日＝「2023年 読書週間 ポスターイラスト募集」告知ポスター入稿

・16日＝東京子ども図書館の「松岡享子さんに感謝する会」に出席

・20日＝「上野の森 親子ブックフェスタ運営委員会」に出席

・23日＝とよたかずひこさん、プラス・アイと文部科学省「子ども読書の日」ポスターについて打ちあわせ

☆28日＝「2023年度 第1回 常務理事会」開催案内を送付

●編集部＆事務局のひ・と・こ・と

●本年4月より読書推進運動協議会の事務局長を務めさせていただくこととなりました。どうぞよろしくお願い申しあげます。当協議会の発足は1959年とのこと。私は1961年生まれですので、想像するに初の「年下」事務局長ということになろうかと考えられます。

●大学卒業後新卒で入社した出版社に37年間勤務いたしました。社会人としてのすべての時間を、雑誌、書籍の編集とその営業管理にかかわる仕事で過ごしてきたわけですが、このたび出版と読書に関する理解と関心を世に広め深める運動に携わることとなりました。重責に身の引き締まる思いです。

●北近畿山間の田舎町でのんきに育ち、大学入学からの4年間は勉学に励むわけでもなく、中央線沿線のボロアパートで毎日ぼんやりしていましたが、本だけはたくさん読んでいました。月並みですが、本は私をあらゆる時代のあらゆる場所に連れて行ってくれ、社会とのかかわりかたやその楽しみかたを教えてくれました。読書推進運動を通して、すこしでも本に恩返しがしたいと、微力ながら努力する所存でおります。

●3年間続いたコロナ禍もようやく終わりが見えてきているようで、5月からは感染法上の位置づけが5類に移行するとのことです。社会もビジネスも新しいステージに入っていくなかでの新米年下事務局長就任です。出版界、読書界のみなさまのご指導、ご鞭撻を心底よりお願い申しあげる次第です。（佐々木）